

ちゅぱ…ちゅぱ…ちゅぱ…

やたらと耳につく水音で目を覚ます。視界は朧げで、瞼は信じられないぐらい重い。ようやくピントがあつたかと思えば、そこに見えたのは見知つたようであつて、まったく知らない天井。

なんか…頭がふわふわする…。あれ…ここはどこだっけ…？確か、自分の家に帰りたくないといふと縋つたら、日暮さんが家に招いてくれて…。出されたお茶を飲みながら、ストーリーカーの愚痴を聞いてもらつてたら…急に眠くなつて…。それから…記憶が…。

ちゅぱつ、ちゅ、ちゅつ、ちゅううううう…♡

「ふえ…え？」

何この音？ 胸のあたりから聞こえる…？

ばやけたままの頭を傾けて胸元に視線をやると、そこに驚愕の光景が広がっていた。  
日暮さんが、私の胸に顔を埋めて、乳首を吸っている。それも恍惚とした表情を浮かべながら。

「えっ…いやああああ!?」

「はあ、はあ、はあ♡ あは、起きちゃった?」

瞬時に覚醒した私が叫び声をあげると、日暮さんが顔を上げてにっこりと笑った。よだれまみれの口元が、窓から入ってくる月明かりに反射して光っているように見える。

「おかあさんのおっぱい、乳首がコリコリでとっても美味しいよ♡ おっきくてムチムチで、たくさん母乳を出してくれそうなふわふわおっぱい…♡」

「やつ、なんでっ…あつ、ああああ!?♡」

ぢゅるるるるっ♡ ぢゅっ♡ ぢゅう♡

右の乳首を強く吸われながら舌で弾かれ、左の乳首を指でくりくり♡と捏ねくり回される。いつからそうしていたのだろうか、両方とも硬くしこってビンビンに勃起しており、刺激を受けるたびに痺れるような快感が胸から全身へと広がっていく。

「やああっ！♡だめ、吸わないでえっ！♡」

「ダメだよ、おかあさん♡ このおっぱいは僕だけのものなんだから♡」

「ひ、ひぐれさん…?」

「ずっとずっとずーっと…♡ このおっぱいに吸い付いて、ちゅうちゅうしたかった♡ おかあさんのために、僕ずっと我慢してたんだよ…♡」

日暮さんがぞっとするような猫撫で声で、私を【おかあさん】と呼ぶ。まるで子供が母親に甘えるように、胸の谷間にすりすり顔を擦り付けて、そうしてまた乳首を口に含まれた。

根本から先に向かってちゅぽ♡ちゅぽ♡と搾り取るように吸い付かれ、下腹部が甘く疼

いた。こんな異常な状況にも関わらず性感を得ている自分に、頭の中が混乱するばかりだ。

「ど、どうしてこんなっ…」

「どうして…？ 決まってるじゃない、あなたが僕の【おかあさん】だからだよ」

「え？」

「ずっと探してたんだ、僕だけのおかあさんを。今まで僕を拒むばかりで愛そうともしない偽物ばかりだった。でも…ようやく見つけた。この世で最も聖なるひと、僕の理想のおかあさん…♡」

日暮さんの大きな手が、私のお腹をゆっくりと撫でる。まるでそこに既に赤ちゃんがいるかのような、優しく愛おしいな触れ方。けれどそんな優しい手つきに反して、私の脳に送られているのは恐怖を告げる信号だけだ。

「ねえ、おかあさん…♡ 僕ね、おかあさんのお腹の中に…子宮に帰りたいんだ…♡」

「ひっ…!」

「おかあさんのお腹の中にいる時が、一番おかあさんの愛を感じられた…♡ もう一度あの暖かい世界に戻りたい…♡ ねえ、いいでしょ？ いいよね？ ねっ？」

日暮さんが何を言っているのかわからない。子宮に帰る？ 私は日暮さんを産んでない。私は日暮さんのおかあさんじゃない！

にゅぷぷぷっ…♡

「ひぁあぁあっ!?!♡」

「はあっ♡ おかあさんのおまんこ、あったかい♡ ここを通って赤ちゃんが産まれてくるんだね♡」

「やめてっ、ゆびっ、抜いてえっ!♡ あっ、だめ、だめだめだめっ…!♡」

日暮さんの長い指が私の膣内へと侵入し、キツく締まったナカを拡張しようとしてくる。この時によりやく、自分が服を何も纏っていないことに気が付いた。